

2022年 哲学若手研究者フォーラム（オンライン）

# 真正性の 2つの意味と 3つの存在論的区別

伊藤迅亮（京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士1年）

2022年7月23日(土) 9:00-10:15 | 会場アカウント1

## 本日のタイムテーブル

---

09:00-09:35 | ch.1 ・ ch.2

09:35-09:40 | 休憩

09:40-09:55 | ch.3

09:55-10:15 | 質疑応答

# コメント・質疑のフォームはこちら

---



- コメントや質疑は  
フォームでも受け付けます
  - 回答は当日口頭のを優先
  - <https://forms.gle/sNkiqHJY6nuzLwkG6>
- 感想もお気軽にどうぞ
  - 発表資料の見やすさ等、何でも
- 運営側が用意したものとは別
  - どちらでもOKです

# 自己紹介



- 氏名 | 伊藤迅亮 いとうしんのすけ
- 所属 | 京都大学大学院  
人間・環境学研究科 修士1年
- 専門 | 分析美学・分析哲学  
(真正性、複製、贋作など)
- SNS | 迅亮 [@eudaimon\\_richo](https://twitter.com/eudaimon_richo)
- Gmail | ito.shinnosuke.99

↑↺ 『トップガン』公式さんがリツイート



『トップガン』公式  @TopGunMovie\_jp · 5月9日



感動  
喜び  
興奮  
愛  
友情  
リスペクト  
人生

すべてが本物だから、心が動く  
“本物”の胸熱イベントムービー、遂に公開！

トム・クルーズ  
『#トップガン  マーヴェリック』  
5.27 [FRI] 全国 ロードショー

あなたも“胸熱”な瞬間を作るひとり！Twitter投稿キャンペーン実施中→ [#トップガン胸熱](#)

[https://twitter.com/TopGunMovie\\_jp/status/1523633416390201344?s=20&t=XVsrbpTphil0qs-gNVYyAA](https://twitter.com/TopGunMovie_jp/status/1523633416390201344?s=20&t=XVsrbpTphil0qs-gNVYyAA)

# 〈本物とは何か〉という問題

## ■本物っているいる！

- 本物のダイヤモンド、本物のブランドバッグ、本物のニオンオオカミ、本物の《モナ・リザ》、本物のヒーロー、本物の友情、本物の絆……

## ■「本物」以外にも、本物さを問題にする語は多い

- 「真正な」、「本当の」、「真の」……

## ■結局のところ、本物であるとはいったい何なのか

- ただ一つの本物さがあるのか
- 本物さは多様であるのか。だとしたら、どのように分類されるのか
  - ▶ ある程度分類されるとして、その下でいかにして多様さが出てくるのか
- 他の諸概念（例えば同一性や現実性など）と何が異なるのか

# 注記

---

- 「本物」という語や概念の研究は様々な分野で行われており、私の発表にも分野の偏りがある
  - 例えば、読んできたもの、参照するものは哲学・美学の成果が多い
  - 美学でもその他の分野でも、素敵な文献やお話があれば教えてください
- とはいえ、なるべく一般的なことを考えたい
  - これまでに哲学でなされた真正性についての考察を進めたい
  - まずは、少なくとも個々の分野での研究と両立し、あわよくば、その研究の見通しをよくできたらうれしい
- 本発表は伊藤(2022)に基づく

# 目次

## ch.1 | 予備的考察

- 1-1 ダットンによる区別——名義／表出
- 1-2 ワイツによる区別——記述／評価
- 1-3 オースティンによる「本物の」の説明

## ch.2 | ミニマルな真正性——「本物の偽物」はどうして本物なのか

- 2-1 「本物の偽物」という逆説的だが理解可能な表現
- 2-2 ミニマルな真正性——i-真正性／m-真正性／c-真正性
- 2-3 あらゆるものは本物である

## ch.3 | 日常的な真正性（へ）

- 3-1 ミニマルな真正性と日常的な真正性の差
- 3-2 オースティンによる説明の再検討



# 本発表の意義・目的

## ① 混乱しがちな真正性の用法・意味を整理する

- 私たちの日常にとって有益
- →ch.1・ch.2

## ② 真正性の探究の基礎を固める（基礎研究）

- 学際的な研究にとって有益
- →ch.2・ch.3

## ③ オーステインによる「本物の」の説明を明確化する

- 哲学・哲学史にとって有益
- →ch.1・ch.3

# 目次と意義の対応関係

## ch.1 | 予備的考察

- 1-1 ダットンによる区別——名義／表出
- 1-2 ワイツによる区別——記述／評価
- 1-3 オースティンによる「本物の」の説明

## ch.2 | ミニマルな真正性——「本物の偽物」

- 2-1 「本物の偽物」という逆説的だが理解可能な表現
- 2-2 ミニマルな真正性——i-真正性／m-真正性／c-真正性
- 2-3 あらゆるものは本物である

## ch.3 | 日常的な真正性（へ）

- 3-1 ミニマルな真正性と日常的な真正性の差
- 3-2 オースティンによる説明の再検討

意義① 真正性概念の整理

意義② 真正性の基礎研究

意義③ オースティン解釈



1

# 予備的考察

# 1

## 予備的考察

1-1 ダットンによる区別——名義／表出

1-2 ワイツによる区別——記述／評価

1-3 オースティンによる「本物の」の説明

# ダットンによる区別——名義／表出

- D・ダットンは芸術作品の真正性を次の2つに区別した (Dutton 2003, 259)

## 名義的真正性 *nominal authenticity*

- 対象の起源や作者や来歴が正しく同定されていること
  - ▶ 例 | 《牛乳を注ぐ女》はまさしくフェルメールによって描かれた本物の絵画（真作）
  - ▶ 例 | 《エマオの食事》は、フェルメールではなくハン・ファン・メーヘレンによって描かれた偽物の絵画（贋作）

## 表出的真正性 *expressive authenticity*

- 個人や社会の価値観や信念を真に表出していること
  - ▶ SEPの“Authenticity”の項目はこちら（芸術には限らないが） (Varga and Guignon 2020)
  - ▶ 例 | パクリをせず、嘘をつかず、素直に、自ら意思決定して作られる作品や演奏は真正

# 〈名義／表出〉は〈対象／行為者〉と理解してもOK

---

- ダットンの区別は芸術作品以外の真正性にも適用できる
- 真正性一般の分類を示したNewman and Smith(2016)では、〈対象object／行為者agent〉という区別がなされる(613-614)
  - 同論文では〈内的／外的〉という区別もなされ、真正性が計4領域に分類される(613-614)
    - ▶ Newman and Smith(2016)の区別には問題点も多いので、いずれ別の箇所で論じる
- この区別はダットンによる〈名義／表出〉にほぼ相当する
  - 名義的真正性（対象の真正性）はいわば「本物性」
  - 表出的真正性（行為者の真正性）はいわば「本心性」「本音性」

# 参考 | Newman and Smith(2016)による真正性の分類(614)

**Table 1.** Two dimensions of authenticity judgments.

		Target	
		Object	Agent
Information Source	External Reference	<b>Historical Authenticity</b> <i>Assessment of spatiotemporal history</i>  cf: Indexical, Nominal, Objective, Pure Authenticity	<b>Value Authenticity</b> <i>Assessment of values</i>  cf: Expressive, Moral Authenticity
	Internal Reference	<b>Categorical Authenticity</b> <i>Assessment of category membership</i>  cf: Iconic, Type, Constructed, Approximate Authenticity	<b>Self Authenticity</b> <i>Assessment with respect to the self</i>  cf: Existential Authenticity, Self-Authentication

# 例 | 贋作を見て覚えた感動は本物か？

---

## ■ 美術史家の岡府寺司のエピソード<sup>1</sup> (岡府寺 2019)

- 大学生の頃、ゴッホだと言われている作品を観て、心の底から感動した
- が、実はその作品はオットー・ヴァッカーによる贋作だった

## ■ 岡府寺の見解

〈たとえ作品が贋作だとしても、心から覚えた感動は本物だ〉

- 先の区別を用いれば、これを単なるオクシモロンとしてでなく理解できる

## ■ 作品が本物か偽物かを問うのは、名義的真正性 (対象の真正性)

## ■ 感動が本物か偽物かを問うのは、表出的真正性 (行為者の真正性)



# 1

## 予備的考察

1-1 ダットンによる区別——名義／表出

1-2 ワイツによる区別——記述／評価

1-3 オースティンによる「本物の」の説明

# ワイツによる区別——記述／評価

- M・ワイツは「芸術作品」という語の用法を次の2つに区別した
  - この区別はディッキーが引き継ぎ、芸術の定義論の前提となった

われわれが「芸術」という概念を実際に使うとき、それは**記述的**（「椅子」と同様に）でもあるし、**評価的**（「よい」と同様に）でもある。言い換えれば、われわれは、「これは芸術作品である」と言うことで、なにかを記述することもあれば、なにかを評価することもある。(Weitz 1956, 33; 邦訳 192)

## 記述的用法 descriptive use

- 例 | 美術史に不案内な人の疑問  
「“R. Mutt 1917”と署名されたこの小便器は芸術作品か？」

## 評価的用法 evaluative use

- 例 | 「鴨川デルタは芸術作品だ」

# ワイツの区別は「本物」にも適用可能

## ■ 「本物」の記述的用法

- 対象が正しく同定されていること（コピーやレプリカなどではないこと）を記述する用法
- 例 | 美術鑑定士「この茶碗は間違いなく北大路魯山人の作で、本物だ」
- 例 | 「このカバンは縫製が甘いから、おそらく偽物だろう」

## ■ 「本物」の評価的用法

- 対象が優れていること、価値をもつことを表す用法
- 例 | 「この卒業論文は本物の論文だ」
  - ▶ 記述だとしたら、これはトートロジーになってしまう

# 記述と評価が分けがたいケースもある

---

## ■ 以下のようなケースは、記述的か評価的か微妙

- 例 | 「バットマンは本物のヒーローだ」
- 例 | 「《真珠の耳飾りの少女》は本物のフェルメール作品だ」
  - ▶ 《真珠の耳飾りの少女》はフェルメールの真作でも傑作でもある

## ■ 〈記述／評価〉の区別は明瞭ではなくグラデーションがある

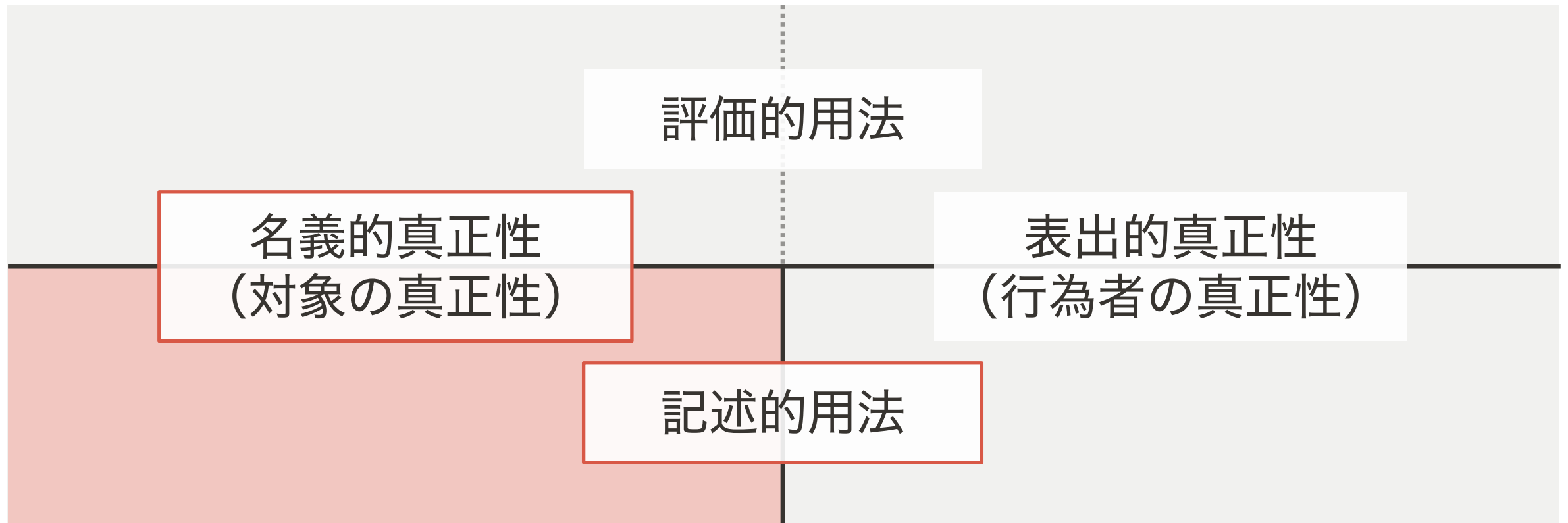
- 純粹に記述的・評価的な用法もあれば、双方とも含む場合もある
- その発話がなされる文脈によって変わることもあるだろう
  - ▶ 例えば、上のフェルメールの例では、  
鑑定家が言えば記述的用法が強まり、美術愛好家が言えば評価的用法が強まる

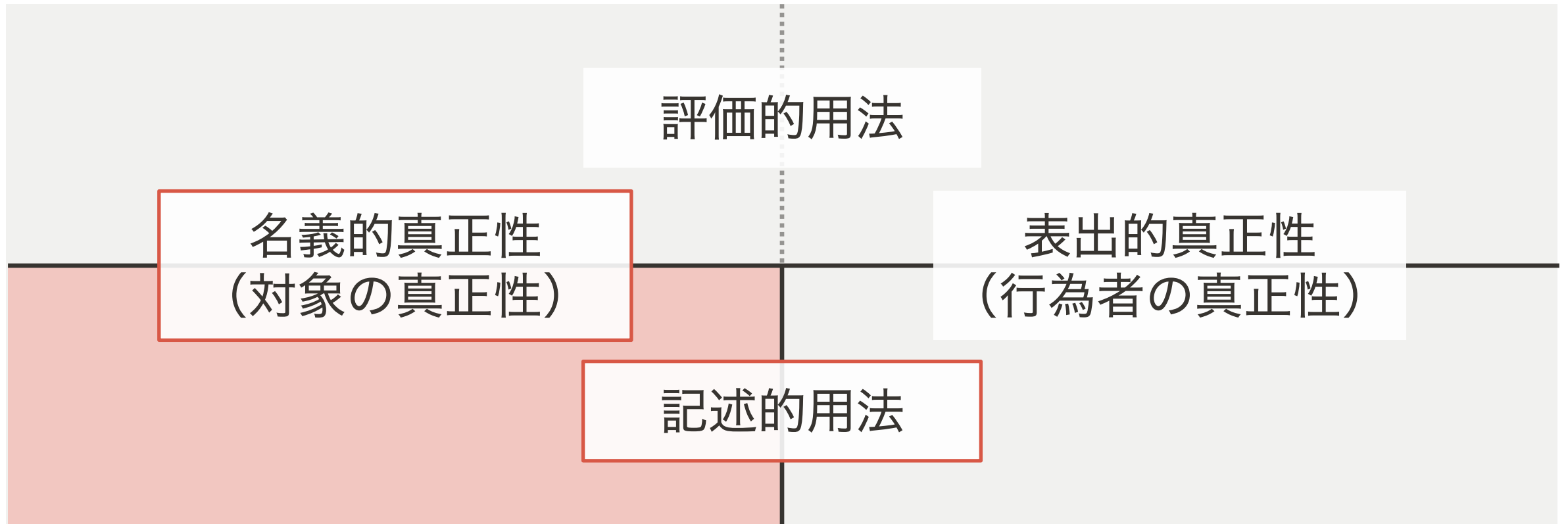
## ■ が、さしあたり 〈記述／評価〉の2つの極があるとは言える

# 以下、名義的真正性・記述的用法をメインに扱う

## ■以下では、名義的真正性と記述的用法に注目する

- ちなみに、評価的用法では、名義と表出の区別はさほどないと思う





この領域の真正性はどのような特徴・機能を持つのか？  
→ **1-3 オースティンによる「本物の」の説明**

# 1

## 予備的考察

1-1 ダットンによる区別——名義／表出

1-2 ワイツによる区別——記述／評価

1-3 オースティンによる「本物の」の説明

# オースティンによる「本物の」の説明

- J・L・オースティンは「本物のreal」に次の4つの特徴を指摘した  
(Austin 1962, 68-77; 邦訳103-114)
- 名詞欲求型 substantive-hungry
- 否定主導語 trouser-word
- 次元語 dimension-word
- 調整語 adjuster-word



# 名詞欲求型

## 名詞欲求型 substantive-hungry

- あるものについて端的に「〇〇である」と述べることはできず、〇〇の何であるかを示す名詞を必要とする、という特徴(Austin 1962, 68-69)

### ■ 例えば、色は名詞欲求型ではない

- 端的に「これはピンクである」と言える

### ■ 「本物」は名詞欲求型

- 端的に「これは本物である」とは言えない
- というのも、「同一の対象が、本物のxでありかつ本物のyでないということがありうるから」(Austin 1962, 69)
  - ▶ 例 | カモっぽく見える対象が、本物の模型のカモでありながら本物のカモではない場合

# 否定主導語

## 否定主導語 trouser-word

- その語の肯定的用法よりも否定的用法の方が主導権を握っている（基礎的である）という特徴 (Austin 1962, 70)

### ■ ふつう、語は肯定的用法が基礎的

「x」を理解するためには、xである、あるいは一つのxである、とはどういうことかを知る必要があるのであり、このことを知ることによって、われわれは、xでない、あるいは一つのxでない、とはどういうことか知らされるのだ [……]。  
(Austin 1962, 70; 邦訳105-06)

### ■ 対して、「本物」は否定的用法が基礎的

# 引用 | 否定主導語の機能について

しかし、「本物の」については、[……] **主導権を握っているのは否定的用法である**。すなわち、あるものが本物である、本物のこれこれである、という主張に定まった意味が付与されるのは、それが本物でないかもしれない、あるいはなかったかもしれないという特定のあり方に照らしてのみ成立することなのである。「本物のカモ」が単なる「カモ」と異なるのは、それが**本物のカモでないさまざまなあり方——模造品の、おもちゃの、絵の、等——を排除**するために用いられるという点においてのみである。(Austin 1962, 70)

「本物の」の機能は、何ものかの特徴づけに肯定的に貢献することではなく、**本物でない可能なあり方を排除**することである [……]。(Austin 1962, 70)

# 「本物の」の機能は、「本物でない」あり方の排除

■つまり、

1. 否定的用法の「本物でない」の方が先に意味が与えられており
2. 「本物でない」あり方を否定・排除する形で、  
肯定的用法の「本物の」の意味が与えられる

■ポイント

- 「本物でない」あり方はたくさんある（模造品、模型、絵、…）
- その多様なあり方を否定・排除することで「本物の」の意味が定まる

# 否定主導語の問題 | 循環と無限後退

## ■ 循環 cf. (Coval and Forrest 1967, 76-77)

- オースティンは否定的用法が基礎的だと述べるが、  
いかにして否定的用法を肯定的用法なしで理解するのか

## ■ 無限後退

- 「本物でない」ことから「本物である」を理解しようとしても、始点がない
- 「本物のカモ」に対応する本物でないあり方は、例えば「模型のカモ」
- では、「本物の模型のカモ」に対応する本物でないあり方は、  
例えば「写真の模型のカモ」、ということになるのか
- では、「本物の写真の模型のカモ」に対応する本物でないあり方は…

## 調整語 adjuster-word

- 有限の語彙だけでは対応することのできない状況において、その有限の語彙と共に働いてその状況を言い表す（対応する）言葉 (Austin 1962, 73-76)
- 「のようだlike」、「本物の～ではないnot a real」、「-ish」、「quasi-」、「-type」、等
  - 例 | 豚に似ているが、豚とまではいかない動物を見たときに  
「豚のようだ」「本物の豚ではない」と述べる
- こうして、限定的な語彙でも多くの状況・事柄に対応できる
  - 既存の言葉に変更を加えないで済むし、新しい言葉も作らないで済む

## 引用 | 調整語の機能について

---

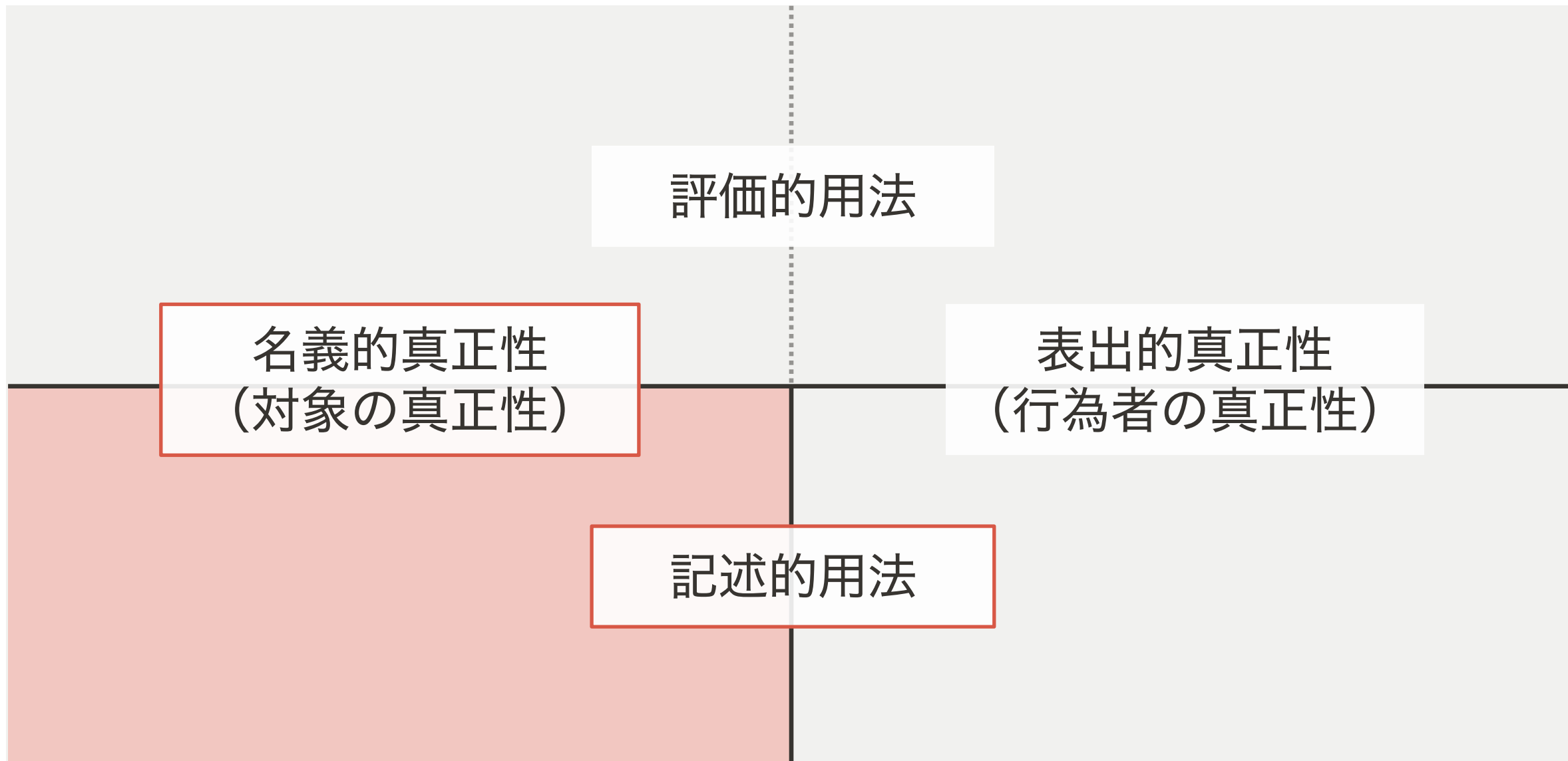
もしことばを、世界に向けて射られた矢のようなものと考えれば、こうした調整語の機能は、真直ぐにだけしか射ることができない無能力から、われわれを開放することにある。こうした語を場合に依じて使うことにより、「豚」といったことばを、いわば、そうしたことばが通常狙いをつけている単純な真直ぐの方向から、僅かに逸れたところにある的に、結びつけることができるのである。(Austin 1962, 74; 邦訳111)

# 「本物」の場合、調整語は否定主導語と表裏一体

- オースティンが挙げている調整語の例は、実のところ「本物の real」ではなく「本物でない not real」
  - ‘But it isn’t a *real* pig’(74) ‘Not a real pig, but like a pig’(75)
- こうした調整が可能なのは「本物の」の否定的用法が、本物でない多様なあり方（模型、おもちゃ、等々）を示すから
- 一方で、否定主導語の「本物の」は、調整語の「本物でない」を否定することで得られる
- 他方で、調整語の「本物でない」は、否定主導語の「本物の」を否定することで得られる



# ch.1のまとめ



# ch.1のまとめ

## 循環と無限後退の問題

名詞欲求型

否定主導語

次元語

調整語



2

ミニマルな真正性

# 2

## ミニマルな真正性

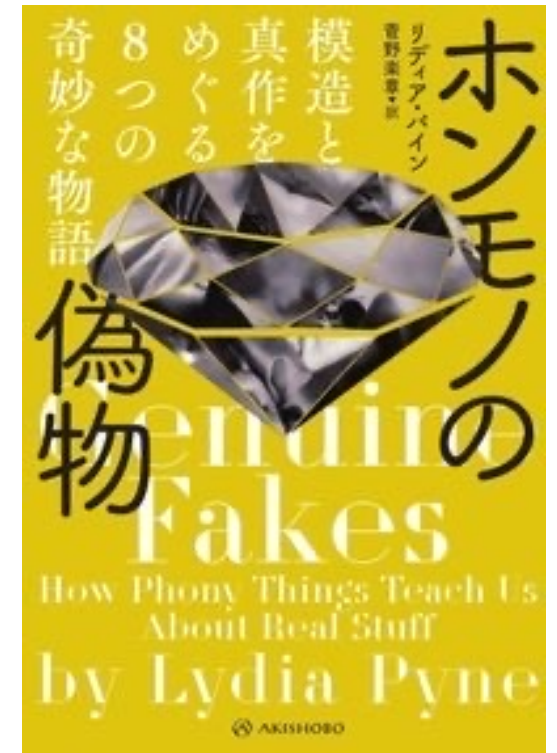
2-1 「本物の偽物」という逆説的だが理解可能な表現

2-2 ミニマルな真正性——i-真正性 / m-真正性 / c-真正性

2-3 あらゆるものは本物である

# 「本物の偽物」という表現

- ふつう「本物」と「偽物」は対立している
  - そのため「本物の偽物」は一見したところ明らかな矛盾
- しかし、私たちは「**本物の偽物**」という表現を容易に理解できる
  - 例 | 「本物の模型のカモ」 (Austin 1962, 69)
  - 例 | ラボグロウンダイヤモンドも結晶構造は天然のダイヤモンドと同じで、本物のダイヤモンド (Pyne 2019, ch.3)
  - 例 | 贋作者の作品もまさにその贋作者の作品として本物



# 偽物と対比されない意味での本物

---

- 「本物の偽物」という表現を理解する上で重要なポイントは、  
もはやこの「本物」は「偽物」と対比されていないという点
  - 事例にある通り、嘘や偽りとは関係がなく、また価値とも関係ない  
(名義的真正性、純粋な記述的用法のみが問題となる)
    - ▶ 「1-2 ワイツによる区別」で説明したように、本稿が問題とするのは記述的用法
    - ▶ とはいえ、日常的な「本物」の用法では、あらかじめ価値があるものに適用されがち  
(そのため、記述的用法と評価的用法の両方が含まれるケースが多い)
  - ch.2では、そうした価値を一切配した  
純粋に記述的用法のみが問題となる「本物」概念を考えている
- 偽物と対比される私たちにお馴染みの真正性概念と区別して、  
これを**ミニマルな真正性**と呼ぶ

# ミニマルな真正性と日常的な真正性

## ミニマルな真正性

- 偽物と対比されない意味での本物さ  
(つまり、日常的な真正性よりも記述的にミニマルな本物さ)
  - ▶ 「本物の偽物」の「本物」を説明できる真正性
- 記述的用法だけが関わる真正性、価値中立的
  - ▶ 日常的な真正性を支える (2-3で説明)

## 日常的な真正性

- 偽物と対比される意味での本物さ
- 記述だけでなく評価的な意味も含みがち、価値関与的
  - ▶ 私たちの価値づけや関心によって (本物のあり方の) 特定の内容が焦点化され、それに照らして、何らかの個物がこちらの意味で「本物」と呼ばれる

# 図式的に説明すると(1) (cf. 入不二 2012, 4-8; 2015, 66-72; 2020, 377-79)

X / Y

- X | 通常の意味での「本物」 → **日常的な真正性**  
Y | 通常の意味での「偽物」
- このままだと「本物の偽物」の表現が理解できない
- 上の図式を「X / Y(X)」に書き換えることはできない
  - なぜなら、そもそもXはYと対比される意味で用いられているから
    - ▶ 入不二は「X vs. Y(X)」と図式化して現実の反対物浸透を説明するが、これはXの意味を多義的にすることで初めて可能になる図式化である



## 図式的に説明すると(2) (cf. 入不二 2012, 4-8; 2015, 66-72; 2020, 377-79)

$X(x) / Y(x)$

- ここで「X」と区別される真正性として「x」を導入したい
- $x$  | 「本物の偽物」に特徴的な意味での「本物」  
→ **ミニマルな真正性**
- 真正性には2つの意味（日常的なそれとミニマルなそれ）がある
  - ch.2で、 $x$ （ミニマルな真正性）の定式化とそこからの帰結を示し、  
ch.3で、それに照らして $X$ （日常的な真正性）を明らかにする

# 想定反論 | ミニマルな真正性は真正性なのか？

- ミニマルな真正性はそもそも真正性と言えるのか？  
かなり奇妙な真正性概念を用いていないか？
- 例えば「本物の模型のカモ」といった表現は、  
異常ないしナンセンスなので、真正性の考察から除外すべきでは？
  - ミニマルな真正性は日常的な真正性とは異なるものなので、  
前者の考察は後者の考察に何か利益をもたらさないのでは？
  - 机上の空論であって、現実の真正性とは関係ないのでは？

# 応答 | ミニマルな真正性はナンセンスではない(1)

## ■以下の2つのStepから示す

- Step 1 | 「本物のニホンオオカミ」はナンセンスではない
- Step 2 | 「本物の模型のカモ」はナンセンスではない

## ■Step1 「本物のニホンオオカミ」

- ある山中でニホンオオカミの生き残りがいたことが判明したと仮定する
- このとき「あれは本物のニホンオオカミである」はナンセンスではない
- では、ニホンオオカミの個体はいつから本物になったのか？
- 少なくとも絶滅以前から本物であったし、ずっと本物だった、そして現在も本物であるはず
  - ▶ というのも、絶滅した途端に個体が本物になると考えるのは不自然だから

# 応答 | ミニマルな真正性はナンセンスではない(2)

## ■ Step 2 「本物の模型のカモ」

- 世の中に存在する模型のカモがほとんど処分されたと仮定する
- その頃あなたは、とあるカモ猟師が模型のカモを用いているのを目撃した
- このとき「それは本物の模型のカモではないか！」はナンセンスでない
- では、模型のカモはいつから本物になったのか？
- ニホンオオカミのときと同様に、  
処分される前からずっと本物だった（そして現在も本物）のではないか

## ■ 同じ議論をあらゆるものに適用すれば、私たちにとって

「本物」と呼ぶに似つかわしくないものも本物であると言える

- このときの本物さがミニマルな真正性にほかならない

# 2

## ミニマルな真正性

2-1 「本物の偽物」という逆説的だが理解可能な表現

2-2 ミニマルな真正性——i-真正性 / m-真正性 / c-真正性

2-3 あらゆるものは本物である

# ミニマルな真正性の3つの区分

- ミニマルな真正性は存在論的な観点から、3つに区別される
  - この区別は日常的な真正性においても維持される
- **例化 instantiation** が問題となる真正性
- **メンバーシップ membership** が問題となる真正性
- **時空的連続性 spatiotemporal continuity** が問題となる真正性
- それぞれ、「**i-真正性**」「**m-真正性**」「**c-真正性**」と呼ぶ

# i-真正性の定義

## i-真正性

- ある個物xが真正なタイプF（あるタイプFとして本物）である iff 個物xがタイプFを例化する
- 例 | 動物、料理、ブランド品、素材、音楽作品・演奏など
  - 「本物のカモ」 「本物のニホンオオカミ」  
「本物の中華料理」 「本物の和食」 「本物の寿司」  
「本物のエルメス」 「本物のバーキン」  
「本物のシルク」 「本革」 「本物のダイヤモンド」  
「真正な『運命』」
  - もちろん「模型のカモ」 「カリフォルニアロール」 「ナイロン」 「ヴィーガンレザー」  
「コピーブランド」 「ラボグロウンダイヤモンド」なども本物

# m-真正性の定義

## m-真正性

- ある個物 $x$ が真正なクラス $F$ （あるクラス $F$ として本物）である iff 個物 $x$ がクラス $F$ のメンバーである
- 例 | 芸術作品oeuvre、所有物、アカウントなど
  - 「本物のフェルメール作品」
  - 「本物の伊藤の所有物」 「本物の伊藤のSNSアカウント」
  - もちろん、「贗作者メーヘレン作品」 「なりすましアカウント」なども本物
- 事例としてはi-真正性やc-真正性より少ない



# c-真正性の定義

## c-真正性

個物xとそれ以前に存在する個物yについて

- ある個物xが真正な個物y（ある個物yとして本物）である iff 個物xが個物yと時空的に連続である
- 例 | 歴史資料、個々の絵画作品・彫刻作品など
  - 「本物の漢委奴国王印」 「本物の《モナ・リザ》」
  - もちろん「偽造の金印」 「ヘッキングのモナ・リザ」 「《エマオの食事》（メーヘレンによる贗作）」なども本物
- いわゆる一点物と呼ばれるものは大抵これ

# 「本物の偽物」はどうして本物なのか

---

## ■ (i-真正)

通常本物と呼ばれるタイプを例化していなくとも、他の何らかのタイプを例化しているために本物であるか

## ■ (m-真正)

通常本物と呼ばれるクラスのメンバーでなくとも、他の何らかのクラスのメンバーであるために本物であるか

## ■ (c-真正)

通常本物と呼ばれる個物と時空的に連続でなくとも、他の何らかの個物と時空的に連続であるために本物である

# ミニマルな真正性のポイント

---

- 何らかの意味で本物であることは、  
ただ例化あるいはメンバーシップあるいは時空的連続性の  
形式的関係のみがあることと必要十分
- ミニマルな真正性は内容にかかわらず、  
ただ存在論的な形式のみによって判断される
  - もちろん、何を例化するか、何のメンバーか、何と時空的連続かは  
本物の「何」であるかには影響を与える
  - しかし、それが本物であることには影響がない

# 個物は2つの意味で多重に本物である / ありうる

- 個物は2つの意味で多重に本物
- 1つ目 | iでもmでもcでも真正である
  - 個物は同時に、何らかのタイプを例化し、何らかのクラスのメンバーであり、何らかの個物と時空的に連続
  - そのため、原理的には、個物はi-真正かつm-真正かつc-真正
- 2つ目 | それぞれの存在論的關係において、多重に真正でありうる
  - 個物は、多重にi-真正、多重にm-真正、多重にc-真正でありうる

# 個物は多重にi-真正、多重にm-真正でありうる

---

## ■ 個物は多重にi-真正

- ある個物が複数のタイプを例化する場合、その個物は幾重にも——その個物が例化しているタイプの数だけの仕方で——i-真正
- 実際、私たちの身の回りの対象はたいてい複数のタイプを例化している

## ■ 個物は多重にm-真正

- ある個物が複数のクラスのメンバーである場合、その個物は幾重にも——その個物がメンバーとなっているクラスの数だけの仕方で——m-真正
- 実際、私たちの身の回りの対象はたいてい複数のクラスのメンバーである

# 個物は多重にc-真正でありうる

---

- どの時点の個物と時空的に連続であるかによって、  
いわば、c-真正性の「開始時点」がどこかによって、  
本物のあり方が複数ある
- この開始時点をどこで取るかは原理的にはオープン
  - 例えばある塑像について、  
その塑像は完成時点の塑像と時空的に連続している意味で本物であり、  
同時に、完成前の素材の粘土とも時空的に連続している意味で本物

# 2

## ミニマルな真正性

2-1 「本物の偽物」という逆説的だが理解可能な表現

2-2 ミニマルな真正性——i-真正性 / m-真正性 / c-真正性

2-3 あらゆるものは本物である

# あらゆるものは本物である

- 前節のi-真正性・m-真正性・c-真正性の定義に従えば、あらゆる個物はi-真正・m-真正・c-真正になる
- つまり、〈あらゆる個物は本物だ〉ということになる
  - 先に示した定義の他に、その存在論的区別に応じて、それぞれ特定の前提を必要とするが
  - これらの前提はそれほどラディカルなものではない



# i-真正性 | あらゆるものは本物である

## 再掲 | i-真正性

- ある個物 $x$ が真正なタイプ $F$ （あるタイプ $F$ として本物）である iff 個物 $x$ がタイプ $F$ を例化する
- あらゆる個物がi-真正なのは、  
どのような個物も何らかのタイプを例化しているから
  - ここでは明らかに〈裸の個別者は存在しない〉という前提をおいているが身の回りの個物についてこの前提を取ることは不自然ではない

# m-真正性 | あらゆるものは本物である

## 再掲 | m-真正性

- ある個物 $x$ が真正なクラス $F$ （あるクラス $F$ として本物）である iff 個物 $x$ がクラス $F$ のメンバーである
- あらゆる個物がm-真正なのは、  
どのような個物も何らかのクラスのメンバーであるから
  - いかなる個物をどのように組み合わせても、  
それに対応するクラスが存在すると仮定する
  - あるいはもう少し穏当に、  
その個物を唯一のメンバーとしてもつクラスが存在すると仮定する

# c-真正性 | あらゆるものは本物である

## 再掲 | c-真正性

個物 $x$ とそれ以前に存在する個物 $y$ について

- ある個物 $x$ が真正な個物 $y$ （ある個物 $y$ として本物）である  
iff 個物 $x$ が個物 $y$ と時空的に連続である
- あらゆる個物がc-真正なのは、  
どのような個物も過去の何らかの個物と時空的に連続しているから
  - あらゆる個物は具体的な対象であり、  
時空間のうちに位置をもつものだと仮定すれば、  
時空間のうちに突如として生成したり消滅したりすることはない

# ミニマルは真正性はトリヴィアル

- 以上より、 $i \cdot m \cdot c$ -真正性、いずれの場合でも、  
〈あらゆる個物は本物である〉ことが帰結する
- 何らかの個物を指して「これは本物である」はトリヴィアルに真
  - $i$ -真正性・ $m$ -真正性・ $c$ -真正性のどれを念頭においても
  - 個物は何らかのタイプを例化し、  
何らかのクラスのメンバーであり、  
何らかの個物と時空的に連続しているから
- あらゆる個物が本物なので、偽物が存在する余地もない

# 想定反論 | やはりミニマルな真正性は受け入れ難い

- 〈あらゆる個物は本物である〉という考えは日常的な実践と乖離
  - 明らかに私たちは一部の個物だけを本物と呼ぶにもかかわらずあらゆる個物が本物だと呼ばれるのはおかしくないか
- この想定反論から示唆されることは例えば次の二つ
  - ミニマルな真正性などというものは存在しない  
仮に存在するとしても、ミニマルな真正性は真正性ではないので、真正性と呼ぶべきではない
    - ▶ これに対する応答については「2-1」の末尾も参照
  - ミニマルな真正性は、日常的な真正性を明らかにする上で役に立たない

# 応答(1) | 日常的な真正性の必要条件として使える

## ■ ミニマルな真正性は日常的な真正性の必要条件として使える

- 日常的な真正性 |

- 一部の個物だけが特別にその地位に与り、偽物と対比される真正性

## ■ 日常的な意味で本物と呼ばれるものが満たす条件を説明できる

- ▶ 〈どの条件を満たせば日常的な意味で本物であるか〉は説明できないが

- つまり、以下を問うことで本物であるとはどういうことかを説明できる

- (1)例化・メンバーシップ・時空的連続性のどれが関わるのか

- (2-1)例化ならどのタイプを例化しているのか

- (2-2)メンバーシップならどのクラスのメンバーなのか

- (2-3)時空的連続性ならどの個物と時空的連続なのか（開始時点はいつか）

# 応答(2) | 日常的な真正性を否定するわけではない

## ■ 私が主張したいのは次

〈日常的な真正性に加えて、ミニマルな真正性も本物である〉

そして、〈ミニマルな真正性は日常的な真正性の基礎をなす〉

### ● 論拠1 |

日常的な真正性を、例えば本物の《モナ・リザ》を説明する際にも、説明の肝心な部分をミニマルな真正性に訴えているのでは？

### ● 論拠2 |

ミニマルな真正性を、真正性として（本物として）認めないならば

〈「本物の偽物」がどうして本物であるのか〉をどうやって説明するのか？

## ch.2のまとめ

X / Y

「本物の偽物」という表現は、逆説的だが理解可能



X(x) / Y(x)

X | 日常的な真正性

x | ミニマルな真正性



## ch.2のまとめ

$X(x) / Y(x)$

- 「x」すなわちミニマルな真正性は、存在論的に3つの区別がある
  - 例化によって定義されるi-真正性
  - メンバーシップによって定義されるm-真正性
  - 時空的連続性によって定義されるc-真正性
- それぞれの定義から〈あらゆる個物が本物である〉ことが帰結する
- ただし、ミニマルな真正性は、日常的な真正性を否定するものではないし、その必要条件を与えもする

休憩

3

日常的な真正性(へ)

# 3

## 日常的な真正性(へ)

3-1 ミニマルな真正性と日常的な真正性の差

3-2 オースティンによる説明の再検討

# 確認 | ミニマルな真正性と日常的な真正性

## ■ ミニマルな真正性

- $i \cdot m \cdot c$ の存在論的關係だけから定義される真正性（純粹に記述的）
- 特定の内容をもたず、ただ存在論的形式のみをもつ
- 個物は $i \cdot m \cdot c$ と多重に真正であり、多重に $i \cdot m \cdot c$ 真正でありうる
- あらゆる個物が本物であり、偽物の存在する余地はない

## ■ 日常的な真正性

- $i \cdot m \cdot c$ の存在論的關係はあくまで必要条件であって、十分条件ではない
- 存在論的形式だけではなく、特定の内容をもつ
- たいてい本物の存在論的關係・あり方は単一（多重に真正ではない）
- 特定の個物だけが本物であり、それに対比される偽物がある

# ミニマルな真正性を定義するだけでは飽き足りない

---

- たしかに、ミニマルな真正性を定義できるのは分かったが、われわれが普段用いている日常的な真正性も明らかにしたい
- 事実、ミニマルな真正性は「本物の偽物」がどうして本物であるのかを説明できるが、逆にどうして偽物であるのかを説明できない（全部本物なので）
  - ▶ ちなみに、公共的な区別を取っ払って一色に塗りつぶすのはよくある手筋だが、本当の腕の見せ所は、塗りつぶした後に、元の区別をより明瞭に描き直すことだと思う
- 以下、日常的な真正性「X」、および偽物「Y」の説明を試みたい
  - とはいえ、これは部分的な説明にとどまる（日常的な真正性（へ））

# 何を足せば日常的な真正性になるのか？

- ミニマルな真正性に照らしてみれば  
日常的な真正性は次の2つの要件を加えたら特徴づけられる
- (1)あらゆる個物ではなく、一部の個物だけが本物であること
- (2)これら一部の本物に対して偽物が存在すること

# (1) 一部の個物だけが本物であることの説明

---

## ■ ミニマルな真正性のうち、

### 私たちが特別に価値をおく真正性を特定する

- 価値をもったり関心が向けられる内容（どのタイプを例化するか、どのクラスのメンバーであるか、どの個物と時空的連続なのか）を特定すること
- 価値や関心の種類によって、結びつきやすい真正性の種類も異なる

## ■ 例 | 天然ダイヤモンドの真正性

前澤友作のSNSアカウントの真正性

ダヴィンチの描いた《モナ・リザ》の真正性



## (2) 一部の本物に対して偽物が存在することの説明

---

- (1)と比べてこちらはやや難しい
- うまくいかない説明として次がある

### 〈(1)で特定した真正性を欠く個物を偽物とする〉

- 例 |

(1)天然ダイヤモンドを一部の本物（日常的な意味での本物）とする

(2)天然ダイヤモンドを例化していない個物を偽物とする

# 偽物は本物の単なる否定形ではない

ラボグロウンダイヤモンドは天然ダイヤモンドを例化していない  
すなわち、ラボグロウンダイヤは本物の天然ダイヤではない  
それゆえ、ラボグロウンダイヤは偽物の天然ダイヤである

- しかし、偽物は本物の単なる否定形ではない
- (1) 「それゆえ」には飛躍がある
  - 非真正であること（本物でないこと）と偽物であることは異なる
- (2) 上記の飛躍がないと言うためには  
特定の「議論領域」を前提とする必要がある

# 伊藤迅亮は偽物の天然ダイヤ？

---

ラボグロウンダイヤモンドは天然ダイヤモンドを例化していない  
すなわち、ラボグロウンダイヤは本物の天然ダイヤではない  
それゆえ、ラボグロウンダイヤは偽物の天然ダイヤである

伊藤迅亮は天然ダイヤモンドを例化していない  
すなわち、伊藤迅亮は本物の天然ダイヤではない  
それゆえ、伊藤迅亮は偽物の天然ダイヤである

- 偽物であることを本物でないことと説明すると、  
関係ない多くの個物もまた偽物の天然ダイヤになる
- これはおかしい（偽物であることを本物でないことは異なる）

# 偽物であることが本物でないことと一致するためには

- どうしても「本物でない」を「偽物である」と考えるならば何らかのより限定的な議論領域を設定する必要があるのでは
- 日常的な真正性では、  
念頭におく真正性に応じた個物の集まりが議論領域となっている
  - 天然ダイヤモンドの真正性に対応する議論領域は、  
ラボグロウンダイヤモンドやその他のキラキラした鉱石などを含み、  
伊藤迅亮やカモといった関係のない個物は含まない
  - ミニマルな真正性の定義では、個物全体が議論領域
- この議論領域においては、  
「本物でないこと」がすなわち「偽物であること」となる

# 日常的な真正性とは何か

- 日常的な真正性とは以下の3要素からなる

## ミニマルな真正性

- 例化のi-真正性、メンバーシップのm-真正性、時空的連続性のc-真正性

## 特定の真正性への価値づけ

- これによって、特定の内容を持つ真正性が特別に本物だとされる
- (1)一部の個物だけが本物であることの説明

## 限定された議論領域の設定

- これによって「本物でない」と「偽物である」ことが一致する
- (2)一部の本物に対して偽物が存在することの説明

# 3

## 日常的な真正性(へ)

3-1 ミニマルな真正性と日常的な真正性の差

3-2 オースティンによる説明の再検討

# 再掲 | オースティンによる「本物の」の説明

循環と無限後退の問題

名詞欲求型

否定主導語

次元語

調整語



# 名詞欲求型の検討

## 再掲 | 名詞欲求型 substantive-hungry

- あるものについて端的に「〇〇である」と述べることはできず、  
〇〇の何であるかを示す名詞を必要とする、という特徴(Austin 1962, 68-69)
- 価値のある、関心が向けられる真正性を特定することは、  
名詞欲求型という特徴づけとおおむね整合的
  - 天然のダイヤモンドや《モナ・リザ》を日常的な真正性と認めることはあるものを端的に本物だとは言わないことと両立
    - ▶ 「本物の天然ダイヤ」「本物の《モナ・リザ》」
- だが、c-真正性のごく一部のケースでは名詞欲求型ではなくなる



# 名詞欲求型の反例 | 灰になった《モナ・リザ》

- 仮定 | 《モナ・リザ》が燃えて灰になってしまったとする
- その灰は《モナ・リザ》と時空的に連続していて本物だが、「本物の《モナ・リザ》」とは言い難い
  - 「本物の灰」とも言い難い、灰を例化していることが言いたいわけではない

## 修正版c-真正性？

個物xとそれ以前に存在する個物yについて

- ある個物xが真正な個物y（ある個物yとして本物）である  
iff 個物xが個物yと時空的に連続である

# 真正の意味を特定するのは必ずしも名詞ではない

- だが、灰になった《モナ・リザ》は端的な本物でもない
  - 「かつて《モナ・リザ》であったものとして本物だ」と言いたいのがから
- 灰になった《モナ・リザ》は、名詞欲求型でないとしても文脈など（？）を通して真正性の意味を特定している
  - 「本物のx」のように名詞を示さないが、どのような本物であるかは明らか
  - ちなみに、オーステインが挙げる「本物の」の事例は本発表でいうi-真正なものがほとんどであり、その範囲では名詞欲求型という特徴づけは妥当

# 否定主導語の検討

## 再掲 | 否定主導語 trouser-word

- その語の肯定的用法よりも否定的用法の方が主導権を握っている（基礎的である）という特徴 (Austin 1962, 70)

「本物のカモ」が単なる「カモ」と異なるのは、それが**本物のカモでないさまざまあり方——模造品の、おもちゃの、絵の、等——を排除するために用いられる**という点においてのみである。(Austin 1962, 70)

- 〈「本物でない」と「偽物である」は異なること〉と  
〈適切な議論領域を設定すれば両者は一致すること〉を踏まえれば  
オースティンのこの特徴づけは改善できる

# 否定主導語ではなく領域主導語

- オースティンのいう「本物でない」は、実のところ「偽物である」
  - 「本物である」の意味は「本物でない」から得られるのではない
- 主導権を握るのは、否定的用法ではなく議論領域
- つまり、否定主導語ではなくて、いわば領域主導語
- 例 | 「これは本物のカモである」
  - カモ、おもちゃのカモ、模型のカモ、絵のカモからなる議論領域がある
  - 価値ある、関心が向けられるカモが日常的な意味の本物だと認められる
  - その議論領域の中で、本物のカモでないものは偽物のカモとなる

# 再掲 | 否定主導語の問題 | 循環と無限後退

---

## ■ 循環 cf. (Coval and Forrest 1967, 76-77)

- オースティンは否定的用法が基礎的だと述べるが、  
いかにして否定的用法を肯定的用法なしで理解するのか

## ■ 無限後退

- 「本物でない」ことから「本物である」を理解しようとしても、始点がない
- 「本物のカモ」に対応する本物でないあり方は、例えば「模型のカモ」
- では、「本物の模型のカモ」に対応する本物でないあり方は、  
例えば「写真の模型のカモ」、ということになるのか
- では、「本物の写真の模型のカモ」に対応する本物でないあり方は…

# 領域主導語は循環もしないし無限後退もしない

## ■ 循環しない

- 「本物の」の意味を、肯定的用法と否定的用法の2項で考えると循環する
- そこで第3項として、個物全体ではない、限定的な議論領域を置いた
  - ▶ 議論領域の中では、「これは本物のaである」という肯定的用法の否定は、「偽物のa」（オースティンのいう否定的用法）となる

## ■ 無限後退もしない

- 日常的な真正性の3要素は  
〈ミニマルな真正性・特定の真正性への価値づけ・議論領域の設定〉
- この説明では、「本物である」の理解に「本物でない」の理解は不要
- 特定の真正性と議論領域があれば、「本物である」ことが言える

# 調整語の検討

## 再掲 | 調整語 adjuster-word

- 有限の語彙だけでは対応することのできない状況において、その有限の語彙と共に働いてその状況を言い表す（対応する）言葉 (Austin 1962, 73-76)
- 関係のある個物が集められた議論領域においては、  
「本物でない」という言葉によって、  
日常的な真正性を欠く（偽物である）ものを指すことができる
- 「本物の豚」という真正性の議論領域には、剥製の豚や豚によく似ているが豚ではない新種の動物などが含まれている
  - その議論領域のもとで、「本物の豚でない」と言えば、オースティンのいう調整が可能ではないか

# 議論領域をどうやって設定するのか

- 以上の仕方での日常的な真正性の説明のアキレス腱は「議論領域の設定」にある
- どのような基準で関係のある個物を取りまとめるのか
  - これは非常に難しい
  - 類似していることや、実際にはAでないものをAと偽ることが全般的には基準になるだろうが、どのような真正性を問うのかによって類似の程度は異なってくる
- 念頭におく真正性に応じて議論領域を設定する必要がある  
その設定（ないし設定の明示化）は諸分野との協業・分業が必要



# ch.3のまとめ

- 日常的な真正性は、  
限定的な議論領域を設定した上で、 ミニマルな真正性を有し、  
特定の価値ある個物だけに適用される真正性
- このように理解される日常的な真正性は、  
概ね名詞欲求型であるが、c-真正性の一部ではそうではない
- また、「本物の」で本当に主導権を握っているのは、  
否定的用法ではなく議論領域であり、 循環や無限後退は生じない

# 参考文献

---

- Austin, John Langshaw. 1962. *Sense and Sensibilia*. Oxford: Clarendon Press. (『知覚の言語』. 丹治信春・守屋唱進(訳). 勁草書房. 1984.)
- Bennett, Jonathan. 1969. “Real.” In *Symposium on J. L. Austin*, edited by K.T. Fann, 267-283. London: Routledge & Kegan Paul.
- Coval, S., and Terry Forrest. 1967. “Which Word Wears the Trousers?” *Mind* 76(301): 73-82.
- Davies, Stephen. 2001. *Musical Works and Performances: A Philosophical Exploration*. New York: Oxford University Press.
- Dutton, Denis. 2003. “Authenticity in Art.” In *The Oxford Handbook of Aesthetics*, edited by Jerrold Levinson, 258-274. New York: Oxford University Press.
- Newman, George E., and Rosanna K. Smith. 2016. “Kinds of Authenticity.” *Philosophy Compass* 11(10): 609–618.
- Pyne, Lydia. 2019. *Genuine Fakes: How Phony Things Teach Us About Real Stuff*. London: Bloomsbury Publishing. (『ホンモノの偽物——模造と真作をめぐる8つの奇妙な物語』. 菅野楽章(訳). 亜紀書房. 2020.)
- Strohl, Matthew. 2019. “On Culinary Authenticity.” *The Journal of Aesthetics and Art Criticism* 77 (2): 157-167.
- Varga, Somogy, and Charles Guignon. 2020. “Authenticity.” In *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, edited by Edward N. Zalta. Spring 2020 Edition.
- Weitz, Morris. 1956. “The Role of Theory in Aesthetics.” *The Journal of Aesthetics and Art Criticism* 15(1): 27–35. (「美学における理論の役割」. 松永伸司(訳). 『フィルカル——分析哲学と文化をつなぐ』 1(2): 176-98. 2016.)
- 伊藤迅亮. 2022. 「「本物」の二つの意味——トリヴィアルな真正性と日常的な真正性」. 京都大学総合人間学部卒業論文.
- 入不二基義. 2012. 「現実の現実性」. 『哲学の挑戦』, 西日本哲学会(編), 1-38. 春風社.
- 入不二基義. 2015. 『あるようにあり、なるようになる——運命論の運命』. 講談社.
- 入不二基義. 2020. 『現実性の問題』. 筑摩書房.
- 園府寺司. 2019. 「ゴッホの贋作を見て覚えた感動は本物か。」. ほぼ日刊イトイ新聞. [https://www.1101.com/n/s/tsukasa\\_kodera](https://www.1101.com/n/s/tsukasa_kodera), (Retrieved 2022-7-20).

# 再掲 | コメント・質疑のフォームはこちら

---



- コメントや質疑は  
フォームでも受け付けます
  - 回答は当日口頭のを優先
  - <https://forms.gle/sNkiqHJY6nuzLwkG6>
- 感想もお気軽にどうぞ
  - 発表資料の見やすさ等、何でも
- 運営側が用意したものとは別
  - どちらでもOKです

# 質疑応答

# 次元語 dimension-word

## 次元語

- 「同じ種類の用語、つまり同じ機能を実現する用語のグループ全体うち、最も一般的で包括的な用語である」という特徴(Austin 1962, 71)
- 「本物」語 ‘reality’-word の語族
  - メンバー | proper, genuine, live, true, authentic, natural
- 「非本物」語 ‘unreality’-wordの語族
  - メンバー | artificial, fake, false, bogus, makeshift, dummy, synthetic
- 本発表では次元語は扱わない
  - 次元語は用語の関係を説明してくれるが、用語のグループに共通の機能は説明しないため（私はこちらに関心がある）

## 参考 | デイヴィスによる真正性の定義

- S・デイヴィスは音楽作品・演奏の真正性を論じるにあたり、真正性一般を次のように説明している

私は〔真正性についての〕中心的概念を捉える方法として次を勧める。「X」がもののタイプや種やクラスの名前である（そして例えば固有名でない）場合、ある真正なXとはあるXである。言い換えれば、**何らかのものは、Xのクラスの実例またはメンバーであるならば、ある真正なXである。** (Davies 2001, 203)

- デイヴィスの定義は存在論的關係のみから構成されており、これは本発表の（とくにch.2の）目的にも沿う
- また、Strohl(2019)は、料理の真正性を、「価値中立的な基本的真正性」と「それを評価する理由」の複合物だとする本発表は同じような枠組みで真正性一般を考える試み、とも言える

# 「本物の」の用法・特徴はそれだけなのか？

---

- J・ベネットはオースティンの4つの特徴づけを批判して、その代替として4つの特徴を挙げている (Bennett 1969)
- この4つにはオースティンのと重複するものもあるが、その中でもオースティンが言及していないのが、「強化用法 the intensifying use」 (270)
  - 「本物のF a real F」はすなわち「極度のF a very much of an F」
  - 日本語としては「非常に～である」くらいの意味
  - 例 | 「本物の悪党」 「本物の黒」

# オースティンの言う‘real’は「本物」でよいのか？

---

- “real”のもう一つの意味である「実在的」にも関係するのでは？  
「本物」と理解してオースティンの議論を不当に狭めていないか？
- 先に挙げたAustin(1962)の第7章後半部では、  
少なくとも実在は関係ない、よって 「本物」で構わない
  - 実際、そこでオースティンが挙げる“real”の例は「本物」に関わる  
例 | 「本物のカモ real duck」 「本物のダイヤモンド real diamond」
  - とはいえ、私は次のことは認める  
現に英語の‘real’は〈実在 (↔現れ)〉と〈本物(↔偽物)〉の両方の意味で使うことができ、  
そこに目をつけたオースティンが〈実在〉の問題を理解するために  
‘real’の用法を分析した（そこに「本物」の分析も含まれていた）ことは



# ミニマルな真正性の定義は個物以外にも適用できる？

---

- 高階の例化、メンバーシップを考えれば適用できる
  - 「辛味は本物の味覚ではなく、甘味は本物の味覚である」
  - 評価的用法抜き「音楽は本物の芸術である」
- とはいえ、何らかの抽象物やクラス自体の真正性を問うならば、〈あらゆるものが真正である〉とは言い難いかもしれない
  - 少なくとも個物の真正性を問うのと同じ仕方では〈あらゆるものが真正である〉という帰結は出てこない

## 応答(3) | 日常的な真正性を偽物とするわけでもない

### ■ 応答(2)とも関連するが、私は

〈日常的な真正性は偽物の真正性であって、ミニマルな真正性こそが本物の真正性なのだ〉と主張したいわけでもない

### ■ このような理解は、むしろミニマルな真正性の眼目と対立しうる

- というのも、日常的な真正性を偽物の真正性と考えるとき、ミニマルな真正性の下では、日常的な真正性も結局のところ「本物の偽物（の真正性）」であって、本物だから
- 本発表ではこれまで個物についての真正性を問題にしていたが、ここだけ、個々の言語使用についての真正性に話を拡張している